

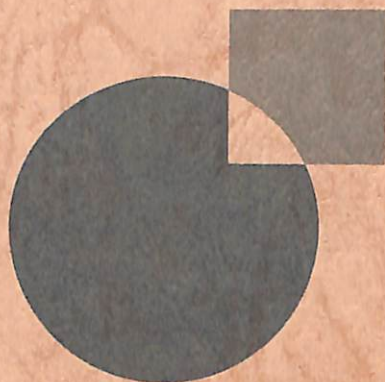
視覚障害者と大学 続編

実践記録

民間企業に働く 視覚障害者

取材・撮影 川野 楠己

編集 盲学生情報センター



日本盲人福祉研究会盲学生情報センター図書出版

発刊にあたって

ハブルがはじけて、雇用の売手市場は沈下しつつあるといえます。しかし、売手市場には変わりありません。それに引き換え、障害者の雇用は、労働省の発表でも、3年間横這い状態だといわれています。

労働省は「障害者の雇用の促進等に関する法律」に基づいて、毎年6月1日現在の障害者（精神薄弱者を含む）の雇用率を発表しています。これによりますと、1991年6月1日現在の一般民間企業に雇用されている障害者は214,814人で、前年に比べ11,180人の増加で、これまでの最高記録だそうです。しかし、一般の常用労働者も増加しているため、実雇用率は法定雇用率1.6%を下回る1.32%にとどまっています。

一方、障害者の中でも重度である視覚障害者の雇用環境は、さらに厳しい状況にあるといわざるをえません。適職だと戦前から言われてきました視覚障害者の鍼・灸・マッサージも、健常者の進出により、この種の業界での比率は7対3で健常者が多数を占めるようになり、視覚障害者の生活圏は脅かされているといわれています。

私たちはこの現実を直視し、国連のキャッチフレーズである「障害者の完全参加と平等」をバックに、視覚障害者の職域拡大に向けて誠心誠意努力しております。

本書は、その「証し」として発行しました。本書を通して、視覚障害者に対する職業観を深めていただければ幸いです。そして、職業自立しておられる方にはげましの言葉を、働く喜びを求めて努力している人たちには理解の手を差し延べていただければ、これ以上の喜びはありません。

視覚障害者の職域拡大については古くからいわれてきていることだけに、いかに困難なことであるかは、肝に銘じております。だからといって手をこまねいて

いては、若い視覚障害者の夢と希望を膨らませることはできませんし、福祉国家・文化国家の日本にとっても将来大損失だと思います。

職域拡大については、多種多様な手だてが必要なのだと思います。たとえば、視覚障害者自身の気迫と努力、日常生活訓練と個々の能力と個性に見合った職業訓練、職業人として自立するための諸制度、雇用主を含めた社会の理解のどれひとつが欠けても、問題解決の進展にはつながらないと私は思います。

本書は、その社会の理解を求めるための啓発書の一助になればと願うものです。

具体的には、本書に「実践記録」として紹介しました15人のひた向きな生き様と、それに対する企業の配慮について読みとっていただき、視覚障害者の雇用拡大に少しでも結び付けられればと期待しております。

そもそも、本会は1961年7月に発足しました。「盲人にすべての大学が点字入試の実施」、「入学後の学習条件の整備」、「卒業後の就職相談」、「啓発活動のための出版」を目的に、地道に歩いてまいりました。そして1991年7月、会発足30周年を迎えることができました。

これを記念して、本会は本書を始め「視覚障害者と大学シリーズ」を昨年末までに順次出版しました。参考までに書き添えますと、「大学門戸開放40年の歩み」、「学習条件整備を求めて」、「点字による国家公務員試験が実現するまで」です。

私は、視覚障害者雇用に対して、国や自治体などの公的機関と民間企業とでは、働きかけに大きな違いがあると思います。特に企業の場合、雇用主の理解もさることながら、大多数の社員のコンセンサスが必要だと思います。

私たちの二十余年近くの働きかけが功を奏し、1991年から点字による国家公務員試験が実施されるようになりました。また、自治体でも僅かずつですが、点字による試験が広がりつつあります。近い将来、民間企業でも健常者同様、点字による試験の実施で採用が決定するよう願っております。

最後になりましたが、取材と撮影に快くご協力下さった15人の皆様と、その皆様が勤務されている企業の関係者、取材と撮影を担当して下さった元NHKチーフ・ディレクターの川野楠己さん、「助成制度」をまとめて下さった労働省の工藤

発刊にあたって

さんと吉泉さん、リストアップ等本書の編集にサゼッションを下さった日本
ライトハウスの日比野所長と宮家さん、国立職業リハビリテーションセンターの
石田さん、日本点字図書館の田中さん、東京失明者更生館の山口さん、それにレ
イアウトと校正をお引き受け下さった菅原祥子さんに、誌上を通して深くお礼を
申し上げます。また、本書を発行するにあたり高額の出版助成を下さった財
団法人日本社会福祉弘済会に対し、重ねて感謝とお礼を申し上げ、失礼いたしま
す。

1992年2月29日

日本盲人福祉研究会（文月会）常務理事
盲学生情報センター所長

高 橋 実

目 次

発刊にあたって

民間企業に働く視覚障害者……………取材・撮影／川野楠己	5
新職業を求めて……………ナイルス部品(株) 五十嵐忠昭さん	6
タッピングマシンに取り組んで……………大島金属工業(株) 中馬茂雄さん	12
160トンのプレス機を動かす……………吉岡金属(株) 松本浩二さん	18
残された視力を生かして ……………マツモト工芸産業(株) 谷川修さん／国貞幹雄さん／武井昇さん	24
見えなくとも、出来る……………(株)イノテック 今井博文さん	30
企業の顔は明るい声で……………野村證券(株) 樹神美和さん／山口亜矢さん	36
頑張れ、ママさん交換手……………(株)大丸・神戸店 宮浦美栄子さん	42
いのちを守る……………太陽神戸三井銀行 深井文子さん	48
ディスプレイを指で読んで……………シー・エス・イー(株) 稲垣誠さん	54
ふるさとで働ける喜び ……………(株)富士通東北北海道システムエンジニアリング 池田敬一さん	60
全盲のプログラマーのパイオニア……………大関(株) 仲佐勤さん	66
はい、お待たせしました、116番受付です……………NTT藤沢支店 福田善吉さん	72
電話で投資相談を……………和光証券(株) 河野好伸さん	78
超高層ビルに囲まれて働く……………大成建設(株) 林淑瑛さん	84
盲導犬とともに教壇へ……………東京経済大学 竹前栄治さん	90
座談会「民間企業に働く視覚障害者の雇用拡大を求めて」……………	97
出席者／川野楠己・日比野清・高橋実	
視覚障害者の雇用促進のための援護・助成制度等……………	107
社会福祉法人日本ライトハウス 視覚障害リハビリテーションセンター 職業訓練部門案内……………	116

民間企業に働く視覚障害者

取材・撮影 川野 楠 己

新職業を求めて

——ボール盤とともに20年

ナイルス部品株式会社

機械工 五十嵐忠昭さん

茨城県つくば市にあるナイルス部品株式会社筑波工場。高速でドリルが回転する最新型のボール盤。その刃先が15センチぐらいの半円型の合金の板に触れたかと思う間に貫通した穴をあける。と、次の瞬間、ドリルの刃は上にあがって止まる。と同時に、合金の板は脇に滑り落ちる。そこで新たに合金の板をセットして、スイッチボタンを押すと、再びドリルが回転して1.5センチの穴を穿つ。

これはオートマチック自動車の心臓部ともいうべきインヒビタースイッチの基本部品に、シリンダー軸を受ける穴をあける作業である。そのため穴の位置や角度はマイクロ単位の誤差も許されない、穴の内面も鏡面仕上げといって滑らかでなければならない、非常に熟練度の高い技術が求められる工程である。

五十嵐忠昭さん（52歳、全盲1級）は、この作業を11人のチームの中で誰よりも速く1時間に300個も仕上げるベテラン工員である。紺の襟のついた淡いブルーの作業服、胸元には写真入りの名札をつけ作業帽をかぶっている。

五十嵐さんはボール盤の前に背筋を伸ばして立ち、後ろに置かれた大きな箱から部品を取り出してドリルの下に正確にセットし、スイッチを入れる。ビニールの腕カバーをした指先は、ドリルに注がれ潤滑油が飛んでいる。彼は20年間、この種のボール盤作業に取り組んできている。

五十嵐さんは、昭和14年生まれ、新潟県出身。小学校4年生の時に野球ボールが目になり、網膜剥離で失明してしまった。新潟県立新潟盲学校を昭和37年に卒業し、はり師、あんま・マッサージ師の資格を取って自宅で開業した。

しかし、盲学校イコール理療教育で、理療業以外に職業がないという既成概念に、彼は大きな疑問を持っていた。事実、現在でも、理療業以外の職業を「新職業」と呼んで、その世界に生きること多くの盲学生は憧憬を持っている。だが



ミクロ単位の正確さが求められる

現実はこの理療業しか生きるすべがなく、そこに落ち着いてしまうのが常である。五十嵐さんは語る。

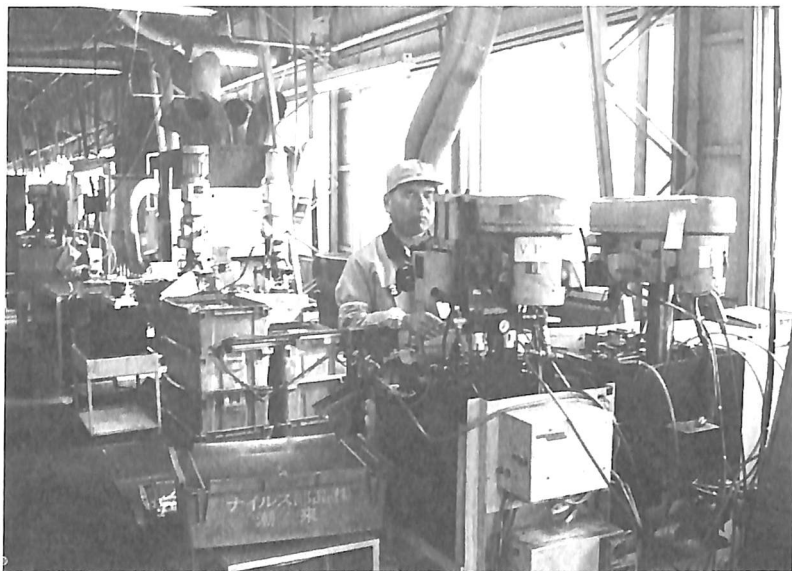
「卒業して、はり・マッサージ師になっても、やはりこの仕事に反発感を持っていました。他の同窓生たちも、いやだ嫌いだと言いながら理療業で生きています。それらを見るにつけて、この仕事が好きだ嫌いだという以前に、こんな気持ちで仕事を続けていたのでは、この業界の進歩発展はないと思ったんです。やはり好きな人が一生懸命やって良い成果をあげていかないと、どんどん健常者に追い越されてしまいます。ですから理療が嫌いな私が、いつまでもや

っててはこの業のためにならないと判断したんです。そこで私は新職業への夢を追求めたのです」

昭和44年9月、大阪にある日本ライトハウスの職業訓練コースに改めて五十嵐さんは入所した。歩行、炊事、洗濯といった生活訓練と、ボール盤・旋盤などの基礎的工作機械の訓練を受けた。

昭和45年9月30日、訓練終了とともにその翌日、ナイルス部品株式会社筑波工場に入社した。

入社を前に夏の暑い時から、日本ライトハウスの教官に伴われて、この筑波工場で実習訓練を始めた。初めての土地で一人で白杖を使つての通勤、工場内の建物の位置関係、自分が働く現場の機械の配置や作業の手順、部品の流れなどなど、学習しなければならないことがたくさんあった。けれども田園に囲まれた筑波の



各種の工作機械が並ぶ五十嵐さんの職場

社員食堂で

空気は澄んでいて、胸の奥まで洗われる気がした。そして食事が何よりもおいしかった。

その年の10月1日、はり・マッサージ師から転向した五十嵐さんは機械工として新たに出発をした。31歳になっていた。

「自分でやりたいと思って始めた仕事だ。自分の生涯が終わった時に、この道を選んで良かったと自分自身が納得出来るようにになりたい。理療はもう捨ててしまったのだから、一生懸命努力しなければならないぞ！」と自分に言い聞かせてのスタートだった。

茨城県つくば市。今日では、筑波大学を始め官庁の研究機関などが50余りも集まり、豊かな自然の中にモダン感覚のビルが点在する、人口13万人の新しい学園研究都市になっている。

その街の西端にあるナイルス部品・筑波工場は11,000坪の敷地に7,000坪の工場棟が建ち、650人が働き、自動車部品のチェンジレバーや計器部品、スイッチなど数多くを製造している。

五十嵐さんが所属する機械課第三係は、鑄造二次加工のグループで、11人でチームを組んでいる。アルミの鑄造から旋盤・ボール盤などを使って二次加工をする工程を受け持っている。

五十嵐さんは入社して間もなく、八軸ボール盤で自動車のブレーキランプの接点になるニッケル合金の部品に深い穴をあける作業を担当したことがあった。高速回転する8本のドリルが、同時に部品に食い込んでいって穴を掘る。その途中で1本のドリルが折れた。急いで取り換え回転を始めると隣の軸のドリルが折れる。これを取り換えるとまた折れて飛ぶ、といった按配で、8本のドリルが次々と折れてしまった。予備のドリルが無くなってしまい、ついに作業を中断しなければならなくなった。

五十嵐さんは、「会社の材料を無駄にしてしまった、1分でも1秒でも早く仕上げなければならない作業の流れを止めてしまった。会社に対して申し訳ないことをしてしまった」という驚きと恐ろしさ、さらに自分には機械工としての実力がないのだ、という絶望感に襲われた。係長に早退を申し出た。しかし係長を始め工場幹部に慰められた瞬間、彼は声をあげてそこに泣き伏した。この原因は、部品の合金の硬度とボール盤の作業能力に問題があり、五十嵐さん自身の技術には何も問題がないことが、後でわかった。彼はこの体験を、一つの試練として踏み越えてきた。

今日では、5種類のボール盤を、その日の作業指示に合わせて使い分けるベテラン工員となっている。

平成3年10月23日、障害者として職業的に自立し20年勤続したことに対して労働大臣表彰を受け、その伝達式が行なわれた。

五十嵐さんはその感激を300人の関係者の前で、「私は目が見えませんが、工場内を自由に歩き回るために、工場の騒音の中から、旋盤の音、プレス盤の音と、その方向を聞き分けて、自分が今どの工場の脇にいてどの方向を向いているのかということ判断して歩く訓練をしました」と、その苦勞の一端を語っている。

15年間ともに働いてきた倉持治久係長は、次のように語る。

「良き同僚として、また、良き友達として、一緒にやってきました。最初は五十嵐さんの障害に対してどのようにしたら良いか迷いました。自然な形で接して、いこうという会社の指示もあり、あまり気を遣わずにやってきました。仕事ののみ込みも早いし、記憶力がいいので驚いています。仕事が変わった時も手とり足とり教えるというわけではなく、ちょっと説明するだけですぐ理解してしてくれます。

指先の感覚で、鋳造した部品にバリが残っている不良品を見つけたり、機械の音で不良品を発見したりしてくれます。障害者だからといった甘えも、ひがみもない人ですから、私たちにとけ込んでやっています」

五十嵐さんは会社の世話で120坪の土地に建つ家を購入した。その家で一人で暮している。休日は洗濯から1週間分の食事の準備までしなければならない。カレーライス、おでん、すき焼きは五十嵐さんの三大メニューである。ラジオをよく聞く、点字本も毎週点字図書館から送られてくるほどよく読んでいる。ワープロを使って漢字まじりの文を書くのが次の目標である。そして定年までこの工場に働くことを願っている。

五十嵐さんを最初の受け入れから現在まで見守ってきた業務部部長・瀧澤勝さんは、

「工場内には点字ブロックを敷いたり彼のために特別な安全設備をするといったことは、何一つありません。そのため外部見学者から不親切だと指摘されたこ

とも随分ありました。それをする
ことが良いかどうか当初考えまし
た。それでも自然な形で受け入
れて、特別扱いはいらないとい
う結論でやってきました。それ
だけに五十嵐さんの負担はかえ
って大きかったろうと思っています
し、怪我をさせたとか、居づら
くなって2年たったら辞めてし
まったとかいうことが起きたら
、世間のもの笑になりますので
、私たちも気を配りながら見
守ってきました。



最初この話が会社のトップからあり
ました。そこで日本ライトハウスの訓
練コースを見学に行きました、正直い

瀧澤業務部長は20年五十嵐さんを見守っている
って、これは大変むずかしいと思いましたね。短期間だけならばいざ知らず、採用
するからには最後まで勤めて欲しいと思いますからね。ところが訓練中の五十
嵐さんに会ったら、これならばということで採用に踏み切ったわけです。そこで
彼を受け入れる前に工場の幹部を集めて研究し、その態勢を整えました。そして
本人にも40日間工場で実習してもらって、お互いに問題点を出し合ったのです。
まあその結果が今日まで来られたわけですが、その評価は大きいですね。五十嵐
さんも無遅刻無欠勤で来ましたし、本人の努力もすばらしいものがあります」

平成3年10月1日、会社は彼の20年勤続を表彰した。同じ職場の同僚たちも表
彰状を入れる立派な額を贈って祝ってくれた。

「私が歩いてきた20年。それは成し得なかったことの余りにも多く、成し得た
ことのその少なさに自らを責め、自分の努力不足を悔やんでみては、また気を取り
直して再び望みを明日に託す、そんな日々の積み重ねでした。"会社は授産所で
はない"という恩師の言葉を肝に銘じて、新たな出発点にします」

と、五十嵐さんは社内報にお礼の言葉を書いている。（平成3年12月13日）

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

●出版助成●財団法人 日本社会福祉弘済会

●出版助成●財団法人 日本社会福祉弘済会

視覚障害者と大学 統編 実践記録民間企業に働く視覚障害者

1992年3月31日発行

実費頒価 1,300円 (送料260円)

取材・撮影 川野 楠 己

編集・発行 日本盲人福祉研究会

盲学生情報センター図書出版

〒166 東京都杉並区成田東5丁目36番15号

電話 03-3220-1421

郵便振替口座 東京6-16103

FAX 03-3220-1422

コロニー印刷